

英知通信

発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2-18-1 (〒661)
TEL (06) 491 - 5083
編集
英知大学広報室

1984. 11. 30.

UNIVERSITAS SAPIENTIAE

No. 41

第十回 英知大学後援会総会開催

去る五月二十六日(土)午後二時より本学日三〇一教室で第十回後援会総会が開催された。出席者は八十名で、大多数は兵庫、大阪、京都、奈良、和歌山などの近府県からであったが、中には北九州市、広島県、静岡県、鳥取県等の遠方からの出席者もあった。会長の挨拶のあと、会長が議長となり、次のように議事が進められた。

昭和五十八年度決算報告 議長の指名により書記が別掲の決算書に基づいて収支の各項目について説明した。助成金については、学生の福利厚生のため(クラブハウス・学生会館設備改善、奨学金、学生校内行事等、学生の教育設備・施設のため(教室棟、体育館、図書館等の改善)、並びに教員の研究助成のため(研究費、研究設備整備等)に当てられた旨説明された。監査報告 廣野監査から、監査の結果適合かつ正確であると認められる旨報告があり、決算報告並びに監査報告とも満場一致で承認された。

昭和五十九年度予算案審議 書記が別掲の予算案について説明し、満場一致で承認された。役員改選 書記が次の理事會案を發表し、満場一致で承認された。

第十回

親睦パーティ開催

絶好の秋日和に恵まれた十一月三日文化の日に、本学では恒例の開学記念特別講演会並びに後援会主催第十回親睦パーティが催された。この親睦パーティは後援会の父兄が先生

會長 中島 忠次(再任)
副會長 加藤 隆正(再任)
副會長 福島 啓介(新任)
監査 阪本美佐子(新任)
監査 佐伯 崇邦(新任)
なお常任理事及び理事は会則通り後日会長より委嘱し發表する予定。新会長の挨拶 中島会長より離任される両監査に対する謝辞と会長再任の挨拶があった。
感謝状並びに記念品の贈呈 中島会長より廣野、田金両監査に感謝状と記念品目録が贈呈され、会員一同から盛大な感謝の拍手が送られた。
懇親茶話会 続いて三十分間、「教育と権威」について傘木学長の講話があった。総会終了後、学生食堂で恒例の懇親茶話会が開催された。今年も十五名の先生方が出席され、父兄は各学科別に分けられた七つのテーブルにそれぞれ二名宛の先生を囲んで着席し、学生のことや大学の教育等について歓談した。和やかなうちに真剣さのただよ話を話し合いが続ぎ、予定の終了時刻を三十分も延長して閉会の挨拶があったが、起ち去りかねて、先生方との話しを続けている父兄も多かった。

方を招待して昼食を共にしながら懇談し、大学の教育方針を理解すると共に、相互の親睦を深めるために毎年開催されているもので、本年は十回目であった。
当日は本学講堂で午前十時半から大阪市立大学教授原寛先生が「妻の中年」と題して講演し、父兄・教員約百八十名の聴衆に深い感銘を与

えた。(別掲要旨参照)
続いて正午過ぎから学生食堂で、親睦パーティが行われた。加藤副会長の開会のことばに続いて中島会長並びに傘木学長の挨拶があり、会長の発声で乾杯し、会食・懇談に入った。最後に福島副会長が閉会のことばを述べた。パーティの参加者は父兄一三五名・先生三〇名で、中には沖繩をはじめ、宮崎・北九州・山梨・長野・福井・愛知・広島・鳥取等の遠方から参加された方もあり、夫婦同伴の出席も三三組に上った。各学年学科別に一四グループに分かれ、グループ毎に授業担当の二乃至三名の先生方を囲んで着席し、和やかな雰囲気の中に子女の教育や当日の講演内容等について熱心な話し合いが続ぎ、時のたつのも忘れる程であった。閉会后、出席の父兄は講師氏原先生の著書を記念に一冊宛渡され、大学祭の催し物や模擬店などに立ち

「英知」への挑戦

第二十一回英知祭

第二十一回英知祭は去る十月三十一日の前夜祭で幕を開け、十一月三日迄本学キャンパスで開催された。今年も四日間とも好天候に恵まれて、「英知」への挑戦―この殻を誰が破るか―をテーマに多彩な催しが華やかに繰りひろげられた。

前夜祭では午後一時から恒例の仮装行列の田吾作一行が園田駅周辺を派手にねり歩いて地域住民との交流を深めた。十一月一日は開学記念行事として後援会父兄らを対象に、大阪市立大学の氏原寛教授による「妻の中年」(要旨別掲)と題する講演会と続いて親睦パーティが開催された。そのため早朝から父兄や



(文責・後援会書記)

寄って、学生と共に和やかな学園の一と時を楽しんでおられた。

卒業生の姿が目立ち、在学生らと学園祭を共に楽しんだ。親睦パーティは本学後援会の主催で父兄と教員が一堂に集い、学科別グループに分かれて子弟の教育などについて話し合うもので、年毎に盛大となり、遠路両親揃っての出席者も増えてきている。学生会館のステージではスペイン語研究部の西語劇や英語研究部による英語劇「マイ・フェア・レディ」の公演や邦楽演奏が披露されたが、英語劇は一般によく知られたミュージカルだけに、場内は満席で大へん好評であった。野外では、チャペル前のステージをメインにしてアトラクションをはじめパンチでデー

収入の部 昭和58年度後援会決算書 (自昭和58年4月1日 至昭和59年3月31日)

項目	予算額	決算額	備考
入会金	10,400,000	10,400,000	新入生4万円×260人
会費	20,960,000	20,960,000	新入生8万円×262人
雑収入	750,000	920,884	銀行利子、パーティ会費等
繰越金	810,329	810,329	昭和57年度よりの繰越金
収入合計	32,920,329	33,091,213	

支出の部

項目	予算額	決算額	備考
助成金	30,500,000	30,000,000	英知大学への助成金
事業費	1,600,000	1,192,940	総会 茶話会・親睦パーティ会費
事務費	100,000	48,450	通信印刷費等
会議費	200,000	106,170	会議等
慶弔費	100,000	36,970	会員死去の際の弔電料等
雑費	120,329	400	手数料
予備費	300,000	36,300	退任役員への記念品料
繰越金		1,669,983	昭和59年度への繰越金
支出合計	32,920,329	33,091,213	

収入の部 昭和59年度後援会予算書 (自昭和59年4月1日 至昭和60年3月31日)

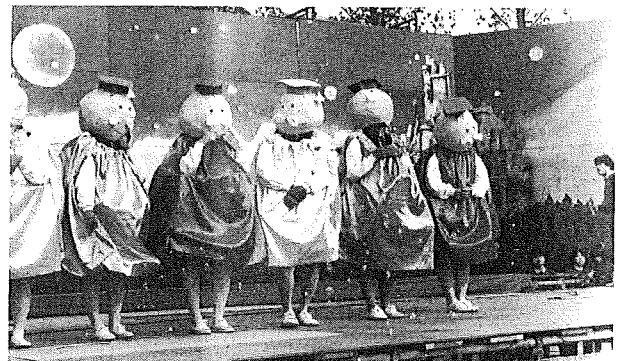
項目	予算額	備考
入会金	10,880,000	新入生4万円×272人
会費	21,760,000	新入生8万円×272人
雑収入	800,000	銀行利子・親睦パーティ会費
繰越金	1,669,983	昭和58年度よりの繰越金
収入合計	35,109,983	

支出の部

項目	予算額	備考
助成金	32,500,000	英知大学への助成金
事業費	1,600,000	総会 茶話会・親睦パーティ会費等
事務費	100,000	通信印刷費等
会議費	200,000	会議費
慶弔費	100,000	会員死去の際の弔電料等
雑費	200,000	
予備費	409,983	
支出合計	35,109,983	

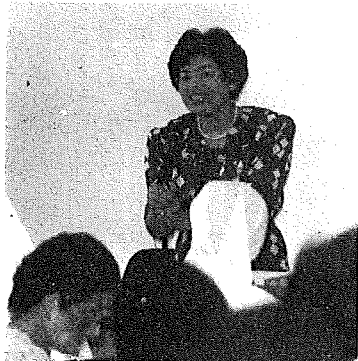
ト、本物は誰だ、のど自慢大会などが行われた。正午、チャペル前の野外ステージで空手道部による空手道の模範演技が披露された。正面に据えられた二十枚ほどの瓦や二個重ねのブロックが、気合と同時に粉々に砕け散る迫力には観客から拍手と感嘆の声があがった。グラウンドには工事現場用の鉄パイプを使った大がかりなステージが生まれ、ここでは田子作コンテストやヘビーメタルのミュージシャンによるスペシャル・ゲスト・ショーが催されたが、入場料は無料とあってか中・高校生ファンがどっと訪れた。教室棟では、文化クラブの研究発表や作品展示、反戦映画の上映会やバザーが開かれ、フォークソング部や軽音楽部の模擬店では演奏を楽しむ客で盛況だった。大学正門から学生会館へ通じるメイ

ンストリートの両側には、体育系クラブによるたこ焼、フランクフルト、ピラフ、スパゲッティなどの模擬店がカラフルに立ち並び、男子学生もエプロン姿で調理に腕ふるう姿が見られて、訪れた父兄や学生達で日没まで賑わった。期間中さわやかな好天に恵まれて、グラウンドを中心に講堂、学生会館、教室棟全域で文化、芸術、スポーツなど多方面にわたって華やかに繰り広げられた祭典は多数の学生、父兄、卒業生や地域住民の参加によって一そう盛りあがり、最終日の夕刻ディスコパーティでファイバーして盛況裡にその幕を閉じた。



夏期公開神学講座開催

本学では毎年七月に一般信徒や修道女を対象に夏期神学講座を開催しているが、今年度は「多元化の時代における霊性」を統一テーマに、七月二十三日から二十七日までの五日間開催され、盛況裡に終了した。日程、講師、テーマは次の通り。七月二十三日(月)奥村一郎師(男子蹴足カメル修道会宇治修道院)「対話と宣教」、七月二十四日(火)沢田和夫師(東京カトリック神学院)「現代をいやし、救うキリスト教」、七月二十五日(水)アンセルモ・マタイス師(上智大



第十八回 英南戦を終えて

去る十一月十七日、十八日の両日第十八回を迎えた英南戦が南山大学で催された。本学からは学長、学生部長、教務部長をはじめ教職員計八名と学生が総勢一六五名で参加、南山大学のリーマー学長、伊藤副学長ら多数の教職員、学生たちの温かい歓迎を受けて、開会式が行われ、熱戦の幕が切っておとされた。本年もさわやかな好天に恵まれ、洋弓、硬盤、サッカー、卓球、バレーボール、バスケットボール、バドミントン等男女公式戦八試合、オリンピック三試合が行われ、それぞれ白熱の好ゲームが展開された。中でもサッカーチームは前日の雨で悪化したグラウンドで両軍応援団の大鼓の響きの中、逆転また逆転の大接戦を演じ五対四と惜しくも一点差で破れたが、両大学の全参加者にとり正に感動の一戦であった。残念ながら総合成績は八対〇に終り、今回より新しくもうけられた優勝トロフィーは南山チームの手に渡されたが、試合結果は別として、英南戦という年一回の対抗試合を機会として、建学の精神を同じくする姉妹校同士の間で教職員と学生のそれぞれのレベルで親睦と交流が回を追う毎にますます深められてゆくことはまことに意義深く、この大会が今後も一層盛大に続けられることを切に願うものである。(学生課長・弥左勉記)

(学生課長・弥左勉記)

開学記念講演

「妻の中年」(要旨)

大阪市立大学教授・臨床心理学

氏原 寛 氏



ボランティア活動などしている40才、50才代の主婦で、経済的にも時間的にも余裕があって恵まれた境遇にある人たちの中には、「このまま老いて死んだのでは女として生きた甲斐がない」という悩みを訴える者が多い。主婦の多くは結婚してすぐに子供が生まれ、夫や子供達の世話に追われて忙しく過しているうち、気がついたら40代もなかばを越えてしまった。今何かをしなければ女として生れてきた甲斐がないような気がする。一般論では男は社会で自分の力を試すチャンスを与えられている。しかし中年になると努力の限界がわかってきて、かなり努力をしても勝てそうにない相手の存在も見えてくるし、実力だけで地位が手に入るわけでもなく、実力があっても運が悪ければどうともならないものだという事を知っている。だから自分としてはまあまあよく頑張った方だという諦めがつく。しかし主婦た

ちは社会で実際に自分を試していないために、誰でも一生懸命頑張れば当然社会に認められるはずだ、しかし自分は結婚のためにこの可能性を失ってしまった。このまま自分を生かすことなく人生を終わってしまうのではやりきれないと悩む。また逆に結婚をしないで社会的に立派な仕事をしている女性の場合では、このまま子供も生まずに朽ちてはるとすれば、女として生まれてきた可能性を生かさずに終わってしまうのではないかとという気持ちにとらわれて、いても立ってもいられないという人もある。前者も後者も同じことなのだ。人間はさまざまな可能性を持って生れてきているが、結局選べるのは一つであり、一つを選べばあとは全部捨てなければならぬ。捨てた方の可能性は大きくみえる。女性は閉経期にさしかかると自分が生きて来なかったもう一つの面に対して未練が出てくるから、振り返ってみて己れの人生に意味があったかどうかを考え込んでしまうようだ。主婦だったために自分に生かした損ねたのか、結婚せず仕事を打ち込んだために自分なりに少し損ねたのか、これを自分なりにどう収めるかは個人の問題だが、50才前後の主婦たちが自分はこのまま何もしないで死んでしまった方がいいのだろうか、というもどかしさに駆られるのはむしろ当然だし、望ましいことかもしれない。

また「自分の夫がせめて隣の主人くらいだったら違った人生があったかもしれない」とぼやく主婦もいるが、結婚とは紳士と淑女の結びつきではなく、亭主と女房がするものであり、亭主は紳士とは異なったものだ。男は外では個性豊かで立派だが一旦結婚して亭主になると豊かな個性が全部消えて、大体似たような存在になってしまふ。ケチでものぐさで薄汚く見栄っぱりで、この点がおかたの亭主たちは共通している。隣の主人は見だしなみも気前も良いさっそうとした紳士として目の前に現れることが多い。しかしこれら一旦帰宅して女房から見ればただの亭主である。女房達は結婚前の理想的な紳士像を頭に描いて現実のわが亭主と比較するので、自分は選択を誤ったのではないかとという気持ちになりやすい。要するに他人の花は赤く見えるもの。どの家庭も似たり寄ったりなものだから、平凡な人間同士として関わっていかなければ仕方がない。この点主婦たちは少し諦めが悪いようだ。

中年の主婦たちが離婚したいとまで想いつめる理由のいま一つは、お互いが一体感となる関わり合いが理想的な関わり合いだと思いたがるどころにあるようだ。一体感とは「我もなければ汝もない」ということで、これは人間関係ではない。人間関係とは我と汝という二人の間に距離を置いた関係のことだが、一体感距離関係がなくて一つになってしまふことで、日本人には特にこの傾向が強く、家族関係にも多いようだ。家族は互いが別の者だとは考えたがらない。どこかで違ふことは知っていてもそれを表面に出したくない。亭主は自分が一生懸命働いているその苦勞を家族が充分理解してくれているはずだと思ひこみ、女房はと

いえば家計をやりくりして家族の面倒をよくみている苦勞を皆が分つてくれていると思ひこんでいる。子供も同じだ。しかし子供は成人して独立し、そこそこの住宅も手に入れて財産もある程度出来た。こうして夫婦が協力する必要もなくなってきた二人つきりになった時、お互いがいかに分りが合つていかなかったかという事に気づく。日本人は本来一体感を求めたがるから、家族が他人であったことに気づいて淋しく思う。人間関係についていえば、夫婦であれ親子であれとも他人同士なのだ。日本人はこの関係を水くさいと思いたがり、一体になろうとするために双方からかけ寄って互いに相手を自分に同調させようとする。人間が互いにわかり合うことは多分不可能なのだが、この戦いのすえ弱い方が折れて完全に一方のペースに乗ってくれているように見えるが、実は他方が「今は相手をたてて折れていてやろう。何年か後にはきつと自分の考えや感じ方を分つてくれるだろうから……」そしてその時こそ我々は一つになれる」と我慢をしてみようので、いつも不満が残る。相手を呑み込んだものの消化されない。また他方が呑み込もうとするので双方から呑み込み合いとなり、いつまでも一体感が持たない。こうして離婚に繋がってしまう。新しい夫婦関係とは「我とは違ふ汝」汝とは違ふ我」という異つた者同士がどう関係をつつけるかということにある。そして淋しい者同士がよく考えてみると20年、30年経った二人には共通の過去があり、共通の子供がいる。別々の存在ながら、よくみると自分に対して相当配慮してくれていることが初めて見えてくる。夫婦とは互いが別々の存在として、しかも親しい関わり合いをもつことが必要だ。別々の存在である淋しさを踏まえて、一体になろうとせず、どう関わっていくかが夫婦の課題だ。

日本ではエリートといわれる亭主族に、自分が出世すること、金持になるのがそのまま家族の幸福に繋がるのだという思い上がりがあるが、これは子供時代の生活のパターンがそのまま続いていることが原因だろう。世の家族の多くは息子の勉強のために犠牲を強いられていて、息子が良い成績をとって良い学校へ入れば家族全員の喜びとなる。自分の業績は家族全員の喜びに繋がるはずだという気持ちが幼い頃から自然にでき上っているから、結婚後もこの気持ちを持ち越して社会へ出た後も自分の出世はすべて家族の幸福と直結するものと思ひ込む。だから妻の評価も夫の出世のためにどれ位協力したかによって良い妻かどうかを問われる。高崎山のサルを例にとれば、時々奇形児が生れているが、自然には弱肉強食の掟があるから人間が配慮をしてやらなければこの赤ん坊は生きられない。強者が弱者を助けて生きることができるとは人間だけであり、これはもともと不自然なことだ。人間はこの不自然な文明社会で本来の自然な気持をコントロールしながら人間的に生きてゆこうとしている。自らが創った不自然な文明社会の中に生れて、そこで不自然に育てられた人間が自然な人間なのだ。従って人間が自然のままに生きることが不可能だ。結婚制度は人間がつくった不自然な制度であるが、人間は大地に種を蒔いたその時から不自然な営みを始めている。従って結婚という不自然な制度を守るには、夫婦が英知をもって共に努力しなければならぬのである。

(講師)うじはらひろし氏
文責・広報室

学生部の話題から

学生部長

和田 幹 男



駅前などでアンケート調査のようなことをしている若者に出会うことがある。異様なまじめさと熱心さで通りゆく人々に接触しようとしている。「あなたの関心は何ですか」、「人生に満足していますか」、「宗教に興味がありますか」などというようなことを尋ねているらしい。ある大学のキャンパスでは、「聖書を学びませんか」、「キリスト教を研究しませんか」などと言って呼びかけることもあるらしい。それに応ずる若者がいると、その場で、あるいは書いて渡された電話番号を使ってある場所に来ないかと誘いをかける。その誘いに乗って行くと、そこはビデオ・ルームで、若者の心を巧みにとらえるビデオが映し出される。まわりの人々も親切でその雰囲気呑み込まれてしまう。一步そこに足を踏み入れると、また明日来なさいとか、二日間の合宿をしましょうなどと

と次々と誘いを受ける。結局、熱っぽい宗教的な講義を連日聞かされて完全に洗脳され、教祖・文鮮明なる者を再臨のキリストであると信じ込まされ、その指令に絶対に従うようにされる。こうして宣教のために街角に立ったり、募金をしたり、印鑑や人参エキスや壺、多宝塔を売るために奔走するようになる。その販売値段も一万円ほどの印鑑を十円で、五千円ほどの壺を百万円以上で売るようにされる。このように、宗教的な信念を植えつけられて、金集め機械のようにされる。ある場合は、外国での活動のために送り出されることがある。背後に強力な組織があるので、周りの者は何だか変だなあと感じつつも、応々にしてその原因がつかめない。関わりはじめた者は組織から口止めされたり、指示されることなしに勝手に行動することを禁じられるらしい。やがて、学校を退学し、家庭を離れて、彼らの共同生活に入るようになる。こうして、周りの者は事の重大さに気づかされる。しかし、親は自分の子を、先生は自分の学生をもう取り返せないことが多い。彼らの居所さえ知らせてもらえない。やがてその息子、娘らは教祖様の立合いのもとに集団結婚をす

る。こうして教祖様の息のかかった清い種をこの汚れた世界に殖やしていくものとされる。何とあやしげな組織であろうか。

これが、最近再び活発に活動をはじめた「原理運動」である。これはまた、宗教的には「統一教会」（「世界基督教統一神霊協会」）と名乗ってキリスト教の仮面をもって従来のキリスト教に近づいてその信者を侵蝕し、政治的には「国際勝共連合」と名乗って反共の諸団体に近づいてこれを呑み込もうとし、さらにある有名大学の元総長と現学長をかかえこんで「世界平和教授アカデミー」なる組織をつくって、大学の諸先生方を味方に引き込もうとしている。原理運動のメンバーは洗脳されているから実の父に代ってお父さまとして慕う文鮮明のために、また実の母に代って彼の三番目の妻韓鶴子のために、一生懸命働いているが、その組織の背後で組織を操っているものは恐ろしいものである。それは文鮮明なるものの野望にほかならない。経済大国だがお人好しの日本から莫大な資金を集め、米国や西欧にも自分の支配を拡大する野望である。その教祖様は現在米国で、宗教家としては考えられないような脱税の罪で裁かれ、監禁されている。宗教家というものは、この世界が頼りとするもの、つまり金の力、権力の力から離脱し、潔白で、清貧で、精神的に澄みきった人物であるはずである。離婚歴もあって多くの子をもつこの教祖様がいんちきなものであることはあまりにも明らかである。その彼がその信徒の中では殉教者のように崇められているのだから、信仰とか宗教とかいうものは恐ろしいものである。原理運動に子供を奪われて、言葉に言い表せない悲しみと憤り、そして絶望の淵に突き落とされ

ている親が多くいる今日、改めて英知大学の学生諸君およびその御両親がこうした危険な勧誘に乗らないよう行動に注意し、まずもって御家庭そのものをまます健康やかな憩いの場となさるよう願ってやまない。また、このような出来事が健全な日韓関係の発展に妨げにならないよう願ってやまない。

研究室だより

研究発表

西山俊彦教授（教養課程・社会学）
「グループ・ダイナミクスと規定要因」日本グループ・ダイナミクス学会第32回大会社会意識部会（座長兼任） 昭和59年10月10・11日 於神戸大学

「大都市近郊の民俗宗教 生駒調査（4） 宝山寺における現世利益信仰とその理論的展開」日本社会学会第57回大会宗教部会昭和59年10月13・14日 於龍谷大学

「事実の成立と集団形成」宗教集団等の事例分析を通して」日本社会心理学会第25回大会対人行動・集団（1）部会（座長兼任） 昭和59年10月27・28日 於新潟大学

「宗教的パーソナリティの類型と若干の問題点」日本行動計量学会第38回月例シンポジウム「現代人の宗教意識と行動」昭和59年12月1日 於大阪府立大学

芝垣哲夫助教（英語英文学科）
6月30日松蔭女子学院大学で開かれた国際日本文化研究会関西支部第一回大会において「日本人のマインナス思考」と題する研究発表を英語で行った。

沼野元義講師（教養課程・心理学）
9月上智大学治療・教育の会において「テストと統計」と題する研究発表を行った。

石野好一講師（仏語仏文学科）
6月学会誌『フランス語学』18の中で「等位接続詞OR——接続表現の意味記述へ向けて——」、「逆転の副詞JUSTEMENT」と題する二つの論文を発表した。

講演

小野敏子講師（教養課程・英語）は9月に伊丹市婦人児童センターで開かれた伊丹市連合婦人会の主催による「国際交流セミナー」で一般市民を対象に国際交流に関する講演を四回にわたって行った。

出版

井上博嗣教授（英語英文学科）は7月「幸せへの道しるべ——カトリック教会への招き」と題する小冊子を「心のともしび運動」Y・B・U本部から出版した。

松本信愛助教（神学科）は2月に中央出版社から「殺人」では解決にならない——人工妊娠中絶の倫理——を出版した（43頁。三二〇円）。

訃報

平松郡太郎師（元神学科教授）
逝去 昭和五十九年九月二十六日
玉谷直實教授（教養課程）
尊父逝去 昭和五十九年九月一日